

被災被キニ 88歳 生きて証言聞く 高知で3回目の企画

今年で3回目のビニ

キデーイン高知（同実行委員会主催）が5日、3日間の日程で高知県内で始まり、1日は土佐清水市で、ビニでの核実験の被災船員の証言を聞くなどのフィールドワークが行われ約80人が参加しました。

太平洋核被災支援センターの山下正寿事務局長が主催者あいさつで、船員の被災の程度がマーンシャル諸島の住民と同じであると指摘し、双方の被災をつないでいくことが課題だとのべました。



谷脇氏（正面中央）の証言を聞く参加者＝5日、高知県土佐清水市

て何ら知らされず、船上で汚染された雨をシヤワーがわりに浴び、汚染された魚を毎日食べ、日本の港に戻って魚をすべて捨てさせられたと報告。自らもがんとをわずらい、亡くなった船員はほとんどが

ったことにしようとしていたが、当事者が頑張っているからこそ、問題がなくなっていないのだと思った」と話しました。

2023.5.6 赤坂

核兵器廃絶へ

核なき世界へ行動続ける

第3回ビニデーイン高知（同実行委員会主催）は最終日の7日、高知市内で全体集会を開き、約250人が参加。「私たちは、世界のヒバクシャと連帯して、『核兵器のない世界』を求め、声をあげ、多様な行動を続けていきます」とする集会宣言を採択しました。

明星大学の竹峰誠一郎教授が講演し、ヒロシマ、ナガサキの後、20

ビニデーイン高知が集会



竹峰氏の講演を聞く参加者＝7日、高知市

00回をこえて核実験が繰り返され、被ばく者が

増え続けたことに言及。「核兵器禁止条約が極めて重要だ。被害者への援助、環境修復をしなければならぬ」と第6条に書いてあり、それを国際協力ですべていこうと第7条に書いてある。担い手は締約国であるかどうかに関係なく、市民のみなさんだ」と力説。「世界の核被害の人たちに目を向けていく、その人たちに何が出来るかを考えて実行していく、それはま

さに平和憲法を生かしていく道でもある」と訴えました。

マーシャル政府の核問題委員会のエウエレン・レレボウ・ジェアリックさんが、核実験で被災した母親のことや自らの活動について紹介しました。

詩人のアーサー・ピナードさんが紙芝居を上演。フリージャーナリストの笹島康仁氏、県原爆被害者の会の桜木敏幸会長、被災船員の小笠原勝氏、ビニ訴訟原告団の下本節子団長、南拓人弁護士らが報告しました。